

特別講演 3

「呼吸器感染症治療に対する経口抗菌薬療法

—ニューキノロン薬を中心に—（新市中肺炎ガイドラインを考慮して）」

新潟市社会事業協会 信楽園病院 内科部長

青木 信樹 先生

呼吸器感染症治療に対しては肺炎球菌、インフルエンザ菌、マイコプラズマ、クラミジア等が原因微生物に対して優れた抗菌力を有し、また吸収が良好で気道への移行が優れた抗菌剤を選択する事が望まれる。

本邦においては、経口抗菌薬はセフェム系薬およびマクロライド薬の使用が極めて高頻度であり、近年、肺炎球菌やインフルエンザ菌における耐性化が問題となっている。肺炎球菌では PRSP、マクロライド耐性肺炎球菌を始め、多剤耐性肺炎球菌の報告が多く見られる。インフルエンザ菌においては、BLNAR が問題になっており、現状の抗菌剤の使い方ではさらに増加するとの報告もある。

成人市中肺炎診療ガイドラインによれば、肺炎球菌性肺炎の外来治療ではペニシリン系経口抗菌薬（高用量）、ペネム系経口薬が、また近年問題視されている PRSP が疑われる場合にはレスピラトリーキノロン経口薬、ケトライド経口薬が推奨されている。レスピラトリーキノロン経口薬には、呼吸器感染症の主要原因菌において耐性菌が増加している現状のなか、そのニーズに応えるべき薬剤も登場してきており、今後は耐性菌を出現させないためにも耐性菌出現阻止濃度（MPC）を十分に上回る薬剤の選択が重要である。